

Title	<紹介>龍ヶ崎市教育委員会編 『龍ヶ崎市史別編II・龍ヶ崎の中世城郭跡：城郭にみる龍ヶ崎のあゆみ』
Author(s)	竹田, 和夫
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1988), 71(3): 496-497
Issue Date	1988-05-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_71_496
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

『龍ヶ崎市史別編Ⅱ』

龍ヶ崎の中世城郭跡

―城郭にみる龍ヶ崎のあゆみ―

本書は茨城県南部に位置し、首都近郊型の住宅都市として発展しつつある龍ヶ崎市の市史別編である。地域の城郭を中心に様々な角度から調査分析したものである。編集の契機として中世城郭は本来その気になれば誰でもが遺構の表面観察をする事が可能な中世資料であるにもかかわらず、最近とみに開発・破壊の危機に直面している現状への危惧をあげている。本書は四章から構成されている。第一章では龍ヶ崎地方の地形と城郭の分布を概観し、城郭の成立・展開・廃城の時期を考察している。また、史料に見える城郭用語(1)館・城・要害、(2)小屋・山小屋・根小屋、(3)寄居・陣城・向城・付城、(4)宿・宿城)の検討をおこなっている。市域内外の史料を博搜し、時期差による語義の変化を明らかにしている。とりわけ、戦国期になっても居館としての「堀内」は城と併存しており、すべてが単

郭方形であったわけではない、という指摘や「城郭を構える」と「要害を構える」の相違等の指摘は興味深い。また最近論議されている山小屋論にもふれている。「寄居」を城郭の一類型として把握し、その入城主体として下級家臣や百姓らが見られる事から「小屋」と類似するという指摘は重要である。第二章では龍ヶ崎地方の城郭に関与した領主及び城郭に関する基本史料を集成し、全文掲載している。ここでは第一次史料(中世文書を中心とした良質な史料)と第二次史料(近世以降の文書・記録・系図・戦記物・地誌類)に峻別されている。従来ともすると後者の史料を典拠に城館が論じられる傾向があったが、あくまでも前者を基本とすべき事を強調している。第三章は中世城郭論総論というべき内容であり、中世城郭と近世城郭の比較、城郭の選地条件(地形と工事量)、中世城郭の変遷(館↓城↓築城理論完成期)、城郭の構造(曲輪・土塁・堀と橋・虎口)を詳細に解説している。土塁・土橋の構築について想定される幾つかの形式を図と写真を用いて説明してあり丁寧である。第四章では中世城郭の分析・考察の具体的方法論を提示している。

(図面の書き方、遺構の計測等)また、あわせて地域の城館跡の個別紹介がなされている。この他本書には付録として、(一)中世龍ヶ崎地方の城郭分布図、(二)明治十年代の龍ヶ崎地方迅速図複製がある。次に本書の刊行意義について考えてみたい。現在、全国的に城郭調査(発掘調査や国庫補助による中世城館悉皆調査)は飛躍的に進展しつつあるが学問としてはいまだ体系化されていない。それは図面の表現方法にも反映している。すなわち各県の城郭調査報告書を眺めてみると縮尺・方位・等高線等でさえも明示していないものが見うけられる。ましてや遺構の図面などケバの描き方が一様ではない。本書では実測図と縄張り図を比較し、後者を再評価し、等高線とケバの様々なパターンを示している。今後この試案ともいえるべき図面表現方法は研究者にとって力強い指標となるであろう。その他城郭研究を停滞させている要因として、城郭をいまだ戦国大名の本城―支城体制の範疇でのみ理解したり、館の形式を単郭方形館↓館城、という一元的発展のシェーマで解釈するなど、山城にしても館にしても戦前からの伝統的な城郭のイメージがまだ根強

支配している現状があげられよう。このような状況を考慮すると本書の刊行意義は大きい。龍ヶ崎という一地域の枠にとどまらず、全国の城郭研究に対して見直し、修正を迫ると同時に格好の入門書の完成として位置づけられよう。ただ、惜しむらくは、出土遺物(陶磁器等)からの城郭編年によれていない事、史料には頻出するが、堀・土塁をめぐらす居館とは異なる「屋敷(防禦施設をもたない)を広義の城館」としてとらえてよいのかどうか、またその場合中世の在家の痕跡とはどうやって区別するのか、等の最近の発掘の成果から考古学研究者によって論議されている点への言及がなされていない不満が残った。何はともあれ本書の編集に尽力された市村高男、藤本正行の両氏に敬意を表したい。

(B5判 二四九頁 一九八七年三月
龍ヶ崎市教育委員会)

(竹田和夫 新潟県教育委員会)

日本学術会議だより

— No. 8 —

昭和六三年二月 日本学術会議広報委員会

◇公開講演会「ハイテクと人類の将来」

昭和六二年度第一回目の公開講演会は、「ハイテクと人類の将来」という主題の基に一月二日、京都市の日本イタリヤ京都会議ホールで開催された。

最初に、近藤次郎本会議会長(経営工学)が、「誰が科学の進歩を停められるか——心臓移植からSDIまで——」と題して、まず、人口の増加によって示される人類の発展が科学の発展に支えられてきたことをあげた。一方では、日航機の墜落事故、TMIやチェルノブイリの原発事故、スペースシャトル爆発事故などにより多くの人命が失われたことを述べた。心臓移植などの生命科学の進歩が高度医療技術の倫理問題に関心を集め、SDI構想が宇宙の平和利用に新しい問題を提起しているなどを指摘した。そして、これからの科学・技術の発達には、人文・社会科学と自然科学の調和を図ることが大切であることを強調した。

次いで、関寛治本会議第二部会員(政治

学、立命館大学教授)は、「ハイテク時代の学術ネットワークと平和の条件」と題して、新しい先端的な科学技術が実際に応用可能となってきたことに伴い、ハイテクを駆使したC&Cというネットワークが世界的に可能となり、複雑なネットワークから成る世界政治の構造に大きな変化をもたらしつつあることを指摘した。そして、このような状況を踏まえて、国家という壁を解決していかなくてはならないこと、そのためには、トロンの発想のコンピュータシステムを基礎として学術情報システムのより自由な地球的規模の再編成を行えるようにすること、人間ネットワークの高次化による国の外交政策の在り方の再検討をすることも重要であることを強調した。

最後に、島袋嘉昌本会議第三部会員(経営学、東洋大学教授)は、「人間と高度科学技術との調和」と題して、「高度科学技術の粋を集めた航空機」の事故を取り上げて、その大部分は人為ミスであることを指摘し、このような事故は、人間と高度科学技術の接点で、何らかのそごが生じて起きるものであることを指摘した。そして、現在人間と高度科学技術とをいかにマネージ